

手漉き和紙工房



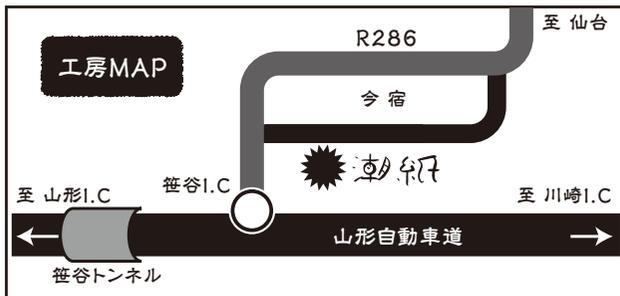
潮紙縁起

平成17年から、仙台市若林区荒浜の障害者就労支援施設で楮を使った流し漉きの和紙を作っていました。

「3.11」の大津波で和紙工房は流されてしまいました。ガレキの中から残された道具を掘り出し、塩とヘドロを洗い流して、再び使えるよう修理しました。

平成25年夏、紙漉き再開の地を笹谷と決め、地元の皆様のご協力をいただき工房が完成しました。

潮騒の調べに似た紙漉きの美しい音色に魅せられて、手漉き和紙作りの再スタートです。



〒989-1502 宮城県柴田郡川崎町今宿笹谷町80
 TEL : 080-3324-4588
 E-mail : ushiogami@me.com
 塚原 英男(代表)

① 楮の刈り取り
 1年で2mも伸びる楮(こうぞ)、来年もよい芽が出るよう根元から刈り取ります。

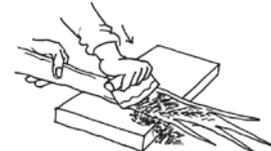


② 楮蒸かし
 束ねた楮を大釜に入れ、これまた大きな桶をかぶせて2~2.5時間蒸します。



③ 皮むき
 蒸しあがった楮に冷水をかけ、まだホクホクしているうちに根元から先端に向かってペロリと皮をむきます。パラパラにならないようにむくにはコツが要ります。

④ 黒皮むき
 枝から外して乾かした黒皮を一昼夜水につけてもどし、柔らかくなった所で外皮を刃物でそぎ落とします。繊維の傷や節の跡を取り除き、白皮にします。



⑦ 叩解
 繊維をたたいて(beat)細かくほぐします。昔は木で叩いていましたが、今はビーターという機械を使います。十分繊維がほぐれば、長かった下ごしらえが完了です。



⑥ 塵取り
 水洗いが終わった白皮を水に浮かべ、手で送りながら残った細かいチリをひとつひとつ取り除きます。地道ですが和紙の品質を決める大切な作業です。



⑤ 煮熟
 十分に水分を吸収させた白皮を、木灰(あく)やソーダ灰で煮て、不純物を取り除きます。冷めたら流水でアルカリ分を洗い流します。



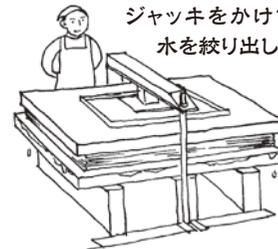
⑧ 紙漉き
 舟に水を張り、トロロアオイから絞り出した粘液(ネリ)を加えたら準備完了。いよいよ紙を漉き始めます。

※トロロアオイ(ネリ)は原料の繊維を水中に分散させる役目をします。暑さに弱いので、紙漉きは冬に適した作業です。

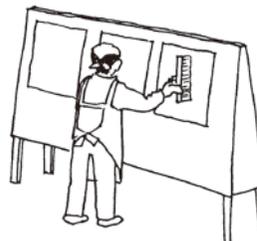


初水・調子・捨水
 籾(すけた)を縦横に振り動かして繊維を絡み合わせます。強く美しい和紙を目指します。

⑨ 圧搾
 紙床(しと)で一晩寝かせると、トロロアオイの粘りが消えます。湿紙に10tジャッキをかけて徐々に水を絞り出します。



⑩ 乾燥
 圧搾中にトロロアオイの粘りが消えることで、板状になった湿紙は1枚1枚はがれます。板や乾燥機に貼って、水分が抜けたら完成です。



和紙の原料について
 楮や三叉、雁皮などがありますが、その中でも楮の繊維は最も長く、昔から薄くて強い紙に用いられてきました。下ごしらえに多くの手間をかけることで不純物を取り除き、百年以上も劣化しない紙に仕上げます。